

『水滸傳』における「好漢」の概念

林 雅 清

一 はじめに

中国四大奇書の一つに数えられる『水滸傳』は、明代初期に白話で書かれた長編の章回小説であり、明清二代を通じてたびたび禁書となったにもかかわらず、民間において脈々と読み継がれてきた通俗小説である。その作者は「容與堂本」などには「施耐庵撰集 羅貫中編纂」と記されているが、現在では、施耐庵や羅貫中と称する人物、あるいはグループにより、宋・元代より伝わっていた水滸説話や講談の内容などを集大成して作られた作品、と考えられている。⁽¹⁾

さて、北宋は徽宗の世、「好漢」たちが水の滸ほとりの梁山泊に集い「天に替わりて道を行う」物語、それが『水滸傳』である。そして、『水滸傳』は「好漢」という言葉が最も多く用いられている作品である。⁽²⁾では、「好漢」とは一体どのような人物を指して言うのであろうか。好漢たるものの行為とは一体どのようなものなのか。

「好漢」は、一般的には「立派な男」という意味である。しかし、何ををもって「立派」とするか、そこが問題であ

る。また、梁山泊の頭領には三人の女性が含まれる。果たして、女性であっても「好漢」と言えるのであろうか。

これらの疑問を、「好漢」という言葉が『水滸傳』の中でどのように使われているかということを探りながら考察し、『水滸傳』における「好漢」という言葉の概念の定義づけを試みたい。

二 抽象的「好漢」

(一) 抽象的概念を表す「好漢」

『水滸傳』に出てくる「好漢」という言葉は、ある抽象的概念を表すものと、具体的にある種の人物を指すものと大別できると考えられる。ここでは、前者を抽象的「好漢」、後者を具体的「好漢」と呼ぶことにする。ではまず、抽象的「好漢」の例でその概念をよく表している箇所を、いくつか挙げてみる。

A 「這棒也使得好了。只是有破綻，贏不得真好漢（その棒さばき、なかなか見事だ。しかし隙がある。それでは真の使い手には勝てぬ）」⁽³⁾【2】

B 「怕的不算好漢（恐れるやつは男ではないぞ）」【2】

C 「小人是個好漢，官司既已吃了，一世也不走（わたしも男です。いったん罪に服したからには、逃げも隠れもいたしません）」【8】

D 「我回去時，須吃他耻笑，不是好漢，難以轉去（戻ればやつにあざ笑われるだろう。それではおれの男がすたる。引き返すことはできん）」【23】

E 「我須知景陽岡上打虎的武都頭，他是清河縣第一箇好漢（景陽岡で虎をなぐり殺した武都頭と言やあ、清河县

きっての豪傑じゃないか)【25】

F「如今來到這里，却恨我這幾日賭輸了，沒一文做好漢請他（せっかく今この地へ見えたってのに、生憎おれときたら、ここ数日博打ですっちまってるもんだから、一席設けていいとこ見せようにも一文なしだ)【38】

G「壯哉、真好漢也（豪快なもんだ。まっこと男よのう)【38】

H「兄弟雖是個不才小人，却是頂天立地的好漢，如何肯做這等之事（わたしはつまらん人間ですが、これでも男一匹の好漢のつもりです。そんなばかなことをするはずはありませんよ)【46】

I「他却是好漢胸襟，怕悞了哥哥大事，那里敢來承惹（だがこの男、好漢たる度量の持ち主で、兄貴の大事を誤ってはならぬと考え、どっこいその誘いには乗らなかつた)【81】

Aは王進が史進の棒さばきを見て、Bは史進が王進に対して、Cは林冲が護送役人の董超・薛霸に対して、Dは武松が景陽岡で虎が出るという告示を見たとき、Eは西門慶が武大の弟は武松であると知ったとき、Fは李逵が宋江に金を借りたあと、Gは宋江が李逵の豪快な食べっぷりを見たとき、Hは石秀が楊雄に対して、それぞれ発した言葉である。また、Iは李師師が秋波を送って誘ってきたときの燕青の態度である。地の文はIのみである。もちろん、ここに挙げているものが全てではないが、この抽象的「好漢」は、会話文中に出てくるものが圧倒的に多い。

それでは、この抽象的「好漢」が示す概念とは何か。これらの「好漢」は全て、いわゆる「男」という意味を表している。「男」とはすなわち、いわゆる「男らしい」男のことである。雄々しさ・豪快さ・強さ・潔さ・積極性など、一般に男性に備わると考えられる特質を備え持った人物、それが「好漢」なのである。

しかし、「好漢」は、これら「男らしさ」の特性を全て備えていなければならぬ、ということではなさそうであ

る。AとEは強い男、あるいは武芸に秀でた者のことをいい、Cは潔さのみを表しており、Gは単に豪快な様を言っているだけと考えられる。また、BとDは「男」としての価値があるかどうかということが問題であり、HとIは義に厚いということを表しているのみと考えられる。Fだけは、「做」という動詞の目的語となっており、他の例とはその用法が異なるが、意味は「顔を立てる」、すなわち「男としての価値や面目を上げる」ということであり、BやDと相通じる。そしてそこには、「強さ」や「潔さ」などという意味は全く含まれない。

以上のことから考えると、単に強いというだけでも「好漢」であり、潔い男・豪快な男・義に厚い男も、それぞれだけで「好漢」なのである。つまり、「男らしさ」の特性をどれか一つでも備えておれば、「立派な男」ということになるのである。むろん「男らしい」は褒め言葉であり、ゆえに、この場合の「好漢」は褒め言葉であるといえる。

(二) 呼びかけの「好漢」

「好漢」は、会話文中において相手のことを呼ぶ「呼びかけ」として用いられる場合があるが、その用法からも、「好漢」が褒め言葉であるということがわかる。以下、その用例を見てみることにする。

呼びかけの「好漢」が最も多く用いられる対象は、武松である。よって、その表現が出てくる箇所、すなわち「武十回」(第二十二回〜第三十二回)の後半部分の用例を、その梗概と共に、以下に紹介しておく。

陽穀県にて兄武大の仇である嫂の潘金蓮とその間夫西門慶を殺害した武松は、東平府を経て孟州へ流罪となる【26】。孟州へ流される途中、十字坡の居酒屋でおかみの孫二娘にしびれ葉を盛られそうになるが、飲んだふりを

して油断させ、逆に孫二娘を床にねじ伏せる。そのとき孫二娘は武松に向かって「好漢饒我（兄さん許してくださいな）」と言い、そこに戻ってきた亭主の張青も「好漢息怒！且饒恕了、小人自有話説（だんな、どうかご勘弁なすってください。お話ししたいこともございますし）」と言い、「願聞好漢大名（だんなのお名前をお聞きしてよろしいでしょうか）」と武松に尋ねる【27】。張青夫妻から行者の衣装と度牒を手に入れ、孟州の牢城に入った武松は、独房に入れられると、周りの囚人連中から幾度か「好漢」と呼びかけられる【28】。典獄の息子施恩の配慮により牢城での待遇が極めて良かったため、武松は施恩の頼みを聞いて、快活林へ蔣門神蔣忠を倒しに行く。武松は蔣忠を打ち倒し、「若要我饒你性命，只要依我三件事（命が惜しけりゃ、おれの言うことを三つ聞きな）」と言う。すると蔣忠は、「好漢饒我！休説三件，便是三百件，我也依得（兄貴、許しておくんなせえ。三つどころか三百でも聞きやすんで）」と言う【29】。回が変わって、蔣忠が武松に「好漢但説，蔣忠都依（兄貴のおっしゃることにはこの蔣忠すべて従いやす）」と言う。武松が景陽岡で虎を仕留めた武都頭であると知った快活林の顔役連中は、蔣忠に代わって「好漢息怒。教他便搬了去，奉還本主（何卒ご容赦くださいませよう。やつには即刻ここより立ち退かせ、ここはもとのだんな様にお返しさせますから）」と謝罪する【30】。

以上が、武松に対する呼びかけの「好漢」の全てである。これら呼びかけの「好漢」は、その使われ方から二種類に分類できる。まず、孟州牢城の囚人連中のように、見た目で「男らしい」と判断して「好漢」と呼ぶもの。この場合は、「好漢」と呼んだ相手に対して、特に見返り等は求めていない。もう一つは、孫二娘や張青、蔣忠や快活林の顔役連中のように、許してもらおうと思って「好漢」と呼ぶもの。いわゆる「おだて」である。この場合は相手が

武松であるため、実際に「強い男」であるが、他の例を見てみると、実際に「好漢」とは思えない場合でも「好漢」と呼ぶ場合がある。それは、話し手が一時的に弱い立場にある場合であるが、孫二娘や蔣忠の場合と同じく、赦免など何らかの見返りを計算して「好漢」と呼ぶのである。特に後者は、「好漢」には褒め言葉としての性格があるゆえに、「おだて」として呼びかけに用いられるのである。

(三) 自分のことを表す「好漢」

また、抽象的「好漢」の用法には、会話文中において自分のことを「好漢」と表現するものがある。先に挙げた例文中CとHがそれであるが、自分のことを表現する場合に褒め言葉を用いると、態度が尊大になってしまうはずである。しかし、CとHの例文では、聞き手は話し手よりも目上、または話し手よりも強い立場にあるため、これらの言葉は謙遜の意を含むものでなければならぬ。先に述べたように「好漢」は褒め言葉であるが、ここでは自分を褒めているとは考えられない。したがって、ここでの「好漢」は、褒め言葉としてのニュアンスは失われ、中立の言葉と化していると考えられる。要するに、騙したり嘘をついたりしないということを「好漢」という言葉で表しているのである。しかしながら、「男らしい」という本来の概念を失っているわけではない。「騙したり嘘をついたりしない」ということは「義を重んじる」ということであり、それはすなわち「男らしさ」の一面でもあるからである。

自分のことを「好漢」と表現している例は、他にもある。

J「我是個清白好漢，如何肯把父母遺體來點汗了（おれは堅気の男だ。両親からさずかったこの身体、汚すわけ

にはいかぬ）」【3】

これは、史進が朱武らに山寨の主になるように勧められたときに言った言葉であるが、この場合の話し手、つまり史進は、聞き手の朱武らより弱い立場にあるものではない。ゆえに、この言葉は謙遜ではない。しかし、褒め言葉でもない。褒め言葉と取れなくもないが、やはりこの「好漢」は、単に男性を表す言葉、すなわち中立の言葉であると考えられる。

(四)「好漢」と「英雄」

「好漢」が中立の言葉にもなるという根拠は他にもある。それは、「英雄」や「豪傑」などという言葉との違いである。

「好漢」は、先に挙げた「男らしさ」の中の「強さ」の面から、また、「英雄好漢」という言葉があるために、「英雄」や「豪傑」などと同一視されるが、これは誤りである。

例えば、呉用が阮氏三兄弟（阮小二・阮小五・阮小七）に晁蓋のことを話す前に言った言葉の中に、

K「如今山東、河北多少英雄豪傑的好漢（いま山東や河北あたりには、英雄豪傑たる好漢がいくらでもいるではないか）」【15】

という表現が出てくる。この「英雄豪傑」は、「好漢」を修飾する言葉であり、名詞が形容詞化したものであると考えられる。「英雄豪傑たる好漢」という言い方ができるとすれば、「英雄豪傑」でない「好漢」も存在するということにもなる。

また、張青が妻の孫二娘に普段より言いつけておいた内容（雲水と女芸人と罪人は殺してはならないということ）

を武松に語る中で、

L 「去戲臺上說得我等江湖上好漢不英雄（舞台の上で、世を渡る侠客なんてのは英雄じゃないなどとふれまわるだろう）」【27】

という表現がある。この「英雄」も形容詞化されていると考えられ、「好漢」と「英雄」は、その用法と概念が同じではないということが理解できよう。

「好漢」と「英雄」が同次元の概念ではないというのは、「四角形」と「正方形」が同次元の概念ではないということと同じことである。つまり、「好漢」は「英雄」や「豪傑」などを包括する概念なのである。また、「英雄」や「豪傑」は完全な褒め言葉であり、中立の言葉にはなり得ないが、「好漢」は中立の概念を表す言葉にもなり得る。

さらに、「好漢」と「英雄」は、その種類をも異にする。それは、褒め言葉としての「好漢」が呼びかけに用いられるのに対し、「英雄」や「豪傑」は呼びかけとして用いられていないからである。同じような概念を表す褒め言葉の場合でもその用法が違うということは、それぞれの言葉の種類自体が異なるということであろう。

三 具体的「好漢」

(一) 具体的人物を示す「好漢」

では次に、具体的「好漢」について見てみる。結論からいうと、具体的「好漢」は褒め言葉ではない。というのは、褒め言葉や貶し言葉けなしという分類ができないということである。そのような対象となる種類の言葉ではないのである。

なぜなら、具体的「好漢」とは、ある種の身分を表す言葉であるからである。その身分とは何か。それは、盗賊団を

束ねる山寨の頭領、特に梁山泊の頭領のことである。

まず、その概念がよくわかる例を挙げてみる。

M 「可憐解珍做了半世好漢、從這百十丈高崖上倒撞下來、死於非命（哀れ半生を好漢として過ごした解珍は、その百丈あまりある高い崖の上からまっ逆さまに落ちて、命を落としてしまった）」【96】

この「做好漢」は、例文Fの「做好漢」とはその意味が異なっている。この「好漢」が抽象的「好漢」の概念に当てはまらないということは、そのすぐ後にある解宝の死の描写と比較してみれば、一目瞭然である。

N 「可憐解寶爲了一世獵戶、做一塊兒射死在烏龍嶺邊竹藤叢裡（哀れ一世の獵師たりし解宝も、烏龍嶺の一角の竹と藤のしげみの中で、身をまるくして射殺されてしまった）」【96】

MとNは表現が対応している。「獵師」は言うまでもなく職業の一種である。そうすると、この「好漢」もそれに近い概念を指すと考えられ、よって梁山泊の頭領のことを指していると考えられるのである。

(二) 梁山泊一〇八人の好漢

ここで、再び抽象的「好漢」の概念について振り返っておくと、それは、強い・潔い・豪快である・義に厚いなど、「男らしさ」の性質のいずれかを十分に備えた男のことであった。具体的「好漢」においても、確かに個人的に「好漢」と表現されている人物の多くは、強い人物である。しかし、梁山泊の「好漢」一〇八人の中には、抽象的「好漢」の概念には当てはまらない人物、つまり、客観的に見て「男らしい」とは言えない人物も含まれている。

万夫不当の勇士であれば、文句なしに「好漢」である。梁山泊の「好漢」一〇八人の中にも、そのような人物は多

い。しかし、そうでない「好漢」もいる。ただ、一般的に弱い、英雄とは言えないなどと考えられている宋江⁽⁴⁾をはじめ、軍師の呉用、道士の公孫勝、そして書生の蕭讓や玉石彫りの金大堅も、武芸の心得があると書かれている。宋江は「刀筆精通、吏道純熟、更兼愛習槍棒、學得武藝多般（文書作りに精通して役人としても立派である上、槍棒を好み諸般の武芸にも心得があった）」のであり【18】、また、孔明・孔亮に槍棒を教え、二人に師匠と呼ばれている【32】。呉用は特に武芸の心得があるとは書かれていないものの、劉唐と雷横の喧嘩に二本の銅鍊（銅の鎖）でもって割って入り、喧嘩を仲裁する【14】。また、「西江月」の詞の一節にて「一雙銅鍊掛腰間、文武雙全師範（一雙の銅鍊腰間に掛け、文武双んで全き師範）」【76】と表現されている。公孫勝は晁蓋に対する自己紹介の中で、「自幼鄉中好習槍棒、學得武藝多般、人但呼爲公孫勝大郎（幼年の頃から田舎で槍棒をたしなみ、諸般の武芸をこなしますので、公孫勝大郎とよばれております）」と言う【15】。蕭讓は「又會使槍弄棒、舞劍輪刀（また槍や棒もできれば劍や刀も使え）」、金大堅は「亦會槍棒廝打（また武芸にもすぐれて）」おり、王英が襲ってきたとき、二人は「倚仗各人胸中本事、便挺着杆棒、逕遶王矮虎（それぞれ身に覚えの手並みをたのみに、棍棒をかまえつつ、王矮虎に立ち向かっていった）」のである【39】。

このように、一般的に「好漢」と考えられていない人物であっても、その技術が優れているいは別にして、武芸の心得があるとされている人物もいる。そうすると、武芸の心得があるということが、「好漢」たる者の第一条件であると考えられる。しかし、梁山泊の「好漢」の中には、武芸の心得があるという表現も腕が立つという表現も全くされていない人物もいる。それは、戴宗・朱武・安道全・皇甫端・宋清・朱貴・蔡慶・石勇・白勝・郁保四・時遷・段景住の十二人である。

では、梁山泊の頭領の中で、「梁山泊好漢」というような包括的表現以外で「好漢」と表現されている人物は、どれだけいるのだろうか。それを分類したものが、次の表である。甲群が「梁山泊好漢」以外にも「好漢」という表現がなされている人物、乙群が「梁山泊好漢」以外では一度も「好漢」と表記されていない人物である。なお、呉用や公孫勝、孫新や顧大嫂など、単独では「好漢」と表現されていない人物も、甲群に入れている。

この表からわかることは、登場が遅いという点もあるかもしれないが、官軍の武将であった人物がほとんど乙群に

乙 群		甲 群		
丁得孫	盧俊義	童威	阮小七	宗江
曹正	閔勝	童猛	楊雄	呉用
施恩	呼延灼	孟康	石秀	公孫勝
湯隆	朱仝	侯健	解珍	林冲
杜興	董平	陳達	解宝	秦明
朱富	張清	楊春	燕青	花榮
蔡福	徐寧	鄭天寿	朱武	柴進
蔡慶	宣贊	陶宗旺	黄信	李応
李立	郝思文	樂和	孫立	魯智深
李雲	韓滔	穆春	裴宣	武松
張青	彭玘	宋万	欧鵬	楊志
孫二娘	单廷珪	杜遷	鄧飛	索超
王定六	魏定国	薛永	燕順	戴宗
郁保四	蕭讓	李忠	楊林	劉唐
時遷	凌振	周通	蔣敬	李逵
段景住	安道全	鄒淵	呂方	史進
	皇甫端	鄒潤	郭盛	穆弘
	扈三娘	朱貴	王英	雷横
	孔明	焦挺	鮑旭	李俊
	孔亮	石勇	樊瑞	阮小二
	金大堅	孫新	項充	張横
	宋清	顧大嫂	李袞	阮小五
	龔旺	白勝	馬麟	張順

(それぞれ右上より梁山泊の席次順)

入っているということである。そしてまた、梁山泊以外の山寨の頭領であった人物は、郁保四以外は全て甲群に入っている。⁽⁶⁾

ここで、抽象的「好漢」の概念に新たな側面が見えてくる。それは、「好漢」は官に楯突く者であるということである。ゆえに、官軍の武将のことは「好漢」と書かれていないのである。このことはまた、具体的「好漢」が山寨の頭領を指しているということの証明にもなる。

以上を総合して考えると、武芸の心得もない上に実際「好漢」と表現されることもない梁山泊の頭領は、先の十二人のうち安道全・皇甫端・宋清・蔡慶・時遷・段景住の六人のみであると言える。安道全と皇甫端は医者であるため、また、時遷と段景住は盗みが得意であることから、それぞれ梁山泊の「好漢」に入れられたのであるが、宋清と蔡慶はこれといった特技もなく、それぞれ「好漢」と表現される兄の宋江や蔡福に付随してきただけであり、全く抽象的「好漢」の概念に当てはまらない人物である。しかし、この六人も、梁山泊の頭領となったがゆえに、梁山泊の「好漢」すなわち具体的「好漢」に含まれるのである。

(三) 一〇八人以外の好漢

梁山泊の「好漢」一〇八人の中で、実際「好漢」と表現されている人物、されていない人物について見てきたが、彼らだけが「好漢」の名を独占していたわけではない。一〇八人以外にも、地の文の中で「好漢」と表現されている人物、すなわち具体的「好漢」がいる。

まず、梁山泊の「好漢」には、一〇八人の他に、王倫と晁蓋がいる。王倫は初代梁山泊首領、晁蓋は二代目である。

晁蓋は、「平生仗義疏財，專愛結識天下好漢。但有人來投奔他的，不論好歹，便留在莊上住。若要去時，又將銀兩齎助他起身。最愛刺槍使棒，亦自身強力壯，不娶妻室，終日只是打熬筋骨（常日頃から義を重んじて金銭には淡泊、好んで天下の好漢たちと交わり、自分のところにたよってくる者は、善人であれ悪人であれ誰でも家にとめてやり、出て行くときは出て行くときで路銀も出してやる。槍術棒術がなによりも好きで、身体が丈夫で腕力も強く、妻も娶らず、一日じゅう身体を鍛えてばかりいた）」【14】のであるから、典型的な「好漢」、すなわち抽象的「好漢」の概念に当てはまる人物の代表とも言うべき男である。しかし、それに比べて王倫は、科擧に落ちた落第書生で、自分の手下にまで「他心地窄狹，安不得人（あいつは度量の狭い男で、なかなか人を信用しない）」【15】などと言われる人物である。到底「好漢」などとは呼べない。しかし、梁山泊の頭領であるため、「好漢」と書かれているのである。王倫・晁蓋以外に、地の文中で「好漢」と書かれている人物には、

- ① 北京大名府の副牌軍周謹【12】
 - ② 高唐州の知府高廉配下の飛天神兵三百人【52】
 - ③ 曾頭市曾家府の曾家五虎（曾塗・曾参⁷⁾・曾索・曾魁・曾昇）および武芸教師の史文恭・蘇定の七人【60】
 - ④ 宋江と名乗って強盗を働いていた牛頭山の王江（あるいは董海⁸⁾）【73】
 - ⑤ 蘇州太湖の榆柳荘の水賊費保・倪雲・卜青・狄成の四人【93】
- がある。この他、自分のことを表す表現や呼びかけを除いて、会話文中で「好漢」と評されている人物には、
- ⑥ 祝家荘の武芸教師欒廷玉（宋江の言葉）【50】
 - ⑦ 太原府の力士任原（梁山泊の小頭目に捕らえられた鳳翔府の棒使いの言葉）【73】

⑧ 寿張県の役所で李逵が無理に作らせた訴訟の被告（李逵の言葉）【74】

⑨ 遼の都統軍兀顔光（遼国王の言葉）【85】

がある。これらは、⑤と⑧を除いて、全て腕が立つと表現されている人物である。⑤は具体的「好漢」であり、⑧は「口で罵るより手を出した方が男らしい」と考える李逵の「好漢」の概念に基づくものといえる。ここからも、「好漢」は武芸に秀でた強い男、という概念が読み取れる。

（四）女頭領と「好漢」

ところで、「好漢」は「男」であると述べた。先ほど見てきた梁山泊の「好漢」以外の人物で「好漢」と表現されている人物も、全て男である。ところが、梁山泊の「好漢」の中には、扈三娘・顧大嫂・孫二娘という三人の女頭領が含まれる。この三人は、腕は立つものの男性ではない。ということは、女性でも「好漢」と呼べるのであろうか。

「漢」という言葉の意味は、やはり「男」である。『水滸傳』には、「好漢」以外に、「漢」という言葉が多数出てくる。例えば「閑漢」・「老漢」・「大漢」・「長漢」・「黒漢」・「軍漢」・「鳥漢」などがあるが、いずれも男性を指している。熟語ではなく、単に「漢」（「那漢」・「這漢」など）や「漢子」という言葉もたくさん使われているが、これも全て男性である。また、「男子漢」や「男兒漢」という言葉はあるが、「女子漢」や「女兒漢」などはない。したがって、「漢」は男性しか指さないとと言える。

ならば、梁山泊の三人の女頭領はなぜ「好漢」と表現されるのか。それは、至って単純明快である。この三人を含めていう「好漢」という言葉は、すべて具体的「好漢」である。本章二節で見てきたように、梁山泊の頭領であれば

無条件に「好漢」という肩書きがもらえるのである。したがって、具体的「好漢」には女性も含まれるということになる。ただし、抽象的「好漢」には、つまり「好漢」本来の意味には、女性は含まれないと考えられる。その証拠に、この三人個人を対象に「好漢」という言葉が使われている箇所は、一例もない。

四 おわりに

「好漢」の概念とは何か。それを、『水滸傳』の中で「好漢」という言葉がどのように使われているかということを中心に考察してきた。「好漢」という言葉の使われ方は、まさに多種多様である。それを、抽象的「好漢」と具体的「好漢」に分け、それぞれの描写に基づいて、その概念の定義づけを試みた。「好漢」の概念がはっきりとその二つに分類される訳ではないが、ここに、抽象的「好漢」の概念をもとに「好漢」という言葉の概念が次第に集約され、新たに具体的「好漢」の概念が生まれたという仮説を立てたい。ただ、むろん集約される前の抽象的概念も残されており、また、集約とは逆に概念の拡張も起こる。さらに、集約された概念からは新たな概念も生まれる。こうして、「好漢」の概念にいくつもの意味合いが生まれたのであろう。

すなわち、「男らしい男」が「好漢」のもとの概念であり、「男らしい男」の中で「強い男」・「武芸の心得のある男」だけが取り出され、さらにそれが「盗賊団の頭領」という概念に集約され、そこから、たとえ男らしくなくとも、強くなくとも「好漢」と表現され得たのである。つまり、武松や魯智深だけでなく、宋江や呉用もある意味「好漢」なのである。そして、盗賊団は「官に楯突く者」であるため、「好漢」には政治権力に屈しない「反体制に属する者」という概念が付加され、それゆえ官軍の武将はいくら強くてもほとんど「好漢」と表現されなかったのであろう。ま

た、これら「概念の集約」とは別次元において、「好漢」という言葉から「男らしい男」という褒め言葉的ニュアンスが薄れ、単に「男」を意味する言葉としても使われるのであろう。これが、先ほど述べた「概念の拡張」である。今回は『水滸傳』の用例のみを挙げて検討してきたが、『水滸傳』に限らず、それ以外の作品で使われている「好漢」という言葉にも、ここで見てきたように抽象的な「男らしい男」という概念を表すものとそうでないものがあるのではなからうか。そのことを読み解くには、「好漢」が一概に「男らしい男」・「強い男」とは言えないという事実を理解しておくことも必要であらう。本稿が「好漢」の現れる作品を読む際の一つの参考になれば、幸いである。

注

- (1) 施耐庵が実在し、実際に小説『水滸傳』を著したとすれば、その成立は元代にまで遡ることになる。しかし、現在発見されている最も古い『水滸傳』の版本(残卷)は、文字表記の面などから明代嘉靖年間に書かれたものと推定されている。佐藤晴彦二〇〇五「國家圖書館藏『水滸傳』殘卷について——嘉靖本か?」(『日本中國學會報』第五十七集)参照。
- 『水滸傳』の版本は多種に亘るが、現在普及している版本は、繁本系の百回本・百二十回本・七十回本の諸本である。百回本の代表は「容與堂本」、百二十回本の代表は「楊定見本」であり、七十回本は明末清初の文芸批評家金聖嘆(一六〇七?—一六六一)によって大きく改編されたものである。『水滸傳』の版本の考察には大内田三郎一九六八「水滸傳版本考——繁本各回本の関係について——」(『ビブリア』四〇)、高島俊男『水滸傳の世界』(大修館書店一九八七)などがある。本稿では、現存最古の完本と考えられている百回本の「容與堂本」に拠ることとし、そのうちの「北京本」の影印である『明容與堂刻水滸傳』全四冊(原題『李卓吾先生批評忠義水滸傳』、中華書局上海編輯所影印本、上海人民出版社一九七五)をテキストとして用いた。したがって、引用文や章回数等は、全てこれに拠るものとする。なお、百二十回本である「楊定見本」の排印本『水滸全傳』全三冊(上海人民出版社一九七五)も適宜参照した。
- (2) 「容與堂本」では四百四十六例。筆者はかつて、『水滸傳』各回の「好漢」の数と、そのうち量詞の付いている「好漢」が指し示す人物をまとめた表を作成した。拙稿二〇〇四「『水滸傳』百二十回本挿入部分と馮夢龍の関係——量詞「籌」

を端緒として」(『中国語研究』第四十六号) 参照。

(3) 引用文後の()内は拙訳、【】内の数字は『水滸傳』の章回数。なお、引用文の句読点は排印本の『水滸傳』(上海人民出版社一九九〇)に拠る。以下同様。

(4) 宋江の形象についての論考には、清山孝子一九九四『水滸伝』における宋江は英雄か(『山口大學文學會志』第四十五卷)がある。

(5) 朱武は、「楊定見本」では両刀の使い手であると紹介されているが、「容與堂本」にはそのような描写はない。

(6) このことから、あるいは「官を蔑み賊を讃える」というような作者の思想や創作の意図が読み取れるやもしれないが、この問題に関しては本論の主題から逸れるため、稿を改めることとする。

(7) 「楊定見本」では曾密となっている。

(8) 原文は「燕青見這出來的好漢正門李逵、潛身暗行、一棒正中那好漢臉頰骨上(燕青は、飛び出してきた好漢が李逵とわたりあっているのを見ると、こっそり忍び寄って行って、いきなり棒でその好漢の頰骨をなぐった)」。この部分は、劉太公の娘をかどわかったのが王江と董海であるということを知った李逵と燕青が、牛頭山の道院に乗り込んで王江一味を殺す場面であるが、本文からはこの人物が王江、董海のどちらであるか判別できないため、このように表記した。